II-330　表面密度噴流フロント部の計算法

山口大学工学部　正　羽田野袈裟義
五洋建設（株）　正○住 田 裕 志
山口大学工学部　正　斉 藤　隆

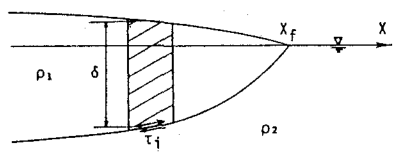
１．まえがき

表面密度噴流は、海域に放・流出された温排水や油などの広がりにみられる現象で、その挙動を精度よく予測することは海域環境上重要な課題である。前報[1]では、一定幅の塩水プールの表面に淡水を全幅均一に連続放出する実験を行いその結果を報告した。しかし非定常なフロント部の流れ特性を簡潔に表現しうる結果は得られなかった。

本研究は、表面密度噴流フロント部の流動を規定する式を特性曲線法により計算する方法を提示するものである。数値計算の結果と前報の実験結果との比較を行なっている。

２．理論の概要

図－１に示すように、密度ρ_2（$=\rho_1+\Delta\rho$）の水の静止域に密度ρ_1の流体が放出されると、放出された流体は、静止した流体の表面を流動する。簡単のために連行を無視すると、基礎式は上層流流体についての連続式および運動方程式であり、それぞれ次式のように書かれる。



図－１　流れの模式図

$$\frac{\partial\delta}{\partial t}+\frac{\partial(u\delta)}{\partial x}=0 \qquad (1)$$

$$\rho\left(\frac{\partial u}{\partial t}+u\frac{\partial u}{\partial x}\right)\delta=-\frac{\partial}{\partial x}\left(\frac{1}{2}\Delta\rho g\delta^2\right)-\tau_i \qquad (2)$$

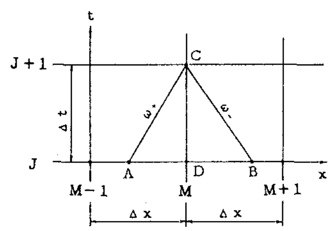
ここに、δ（x,t）は上層流の流動厚さ、u（x,t）は上層流の断面平均流速、$\tau_i=f_i\rho u^2$は界面せん断応力である。Massau にならい[2]、$C^2=\Delta\rho g\delta/\rho$を導入して得られる式（1）および（2）の変形式の和と差を特性曲線表示すると、特性曲線ω_+とω_-上で次のようなる。

$$\omega_+ : dx/dt=u+C\text{上で}\quad d(u+2C)/dt=-\Delta\rho/\rho\cdot g f_i u^2/C^2=-f_i u^2/\delta \qquad (3)$$

$$\omega_- : dx/dt=u-C\text{上で}\quad d(u-2C)/dt=-f_i u^2/\delta \qquad (4)$$

３．計算法

通常点の計算はふつうの特性曲線網による方法[3]を採用すればよい。即ち、図－２に示すように、時間サフィックスＪの全ての格子点で水理量が与えられたとき、まず図の格子点Ｃを通る特性曲線の傾きをＤ点でのＣおよびｕを用いて与える。次にＡ，Ｂ点での水理量を格子点（Ｊ，Ｍ－１）とＤ点、およびＤ点と格子点（Ｊ，Ｍ＋１）の水理量の各々内分値で与え、それらを式（３）と（４）の差分式に代入することによりＣ点の水理量を求める。



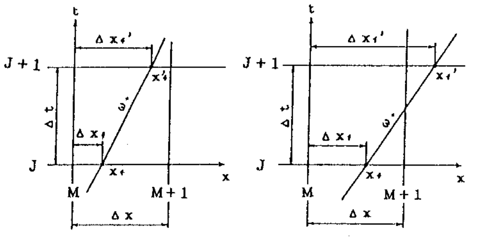
図－２　内点の計算法

しかしながら、フロント部では流動厚さが有限値からゼロへと変化するため、式（３）と（４）の分母がゼロとなる部分が生じる。その場合には計算が不可能となる。この問題を回避するため、この位置での流動厚さδに適当な小さな値δ_fを与え、特性曲線ω_+について（すなわち

式（3）で）のみ計算を行なう。このδをフロントでの境界条件：$\delta=\delta_f$（すなわち$C=C_f$）とするわけである。図－3のように、時間サフィックスJ，J＋1のステップでのフロント位置をそれぞれx_f，x_f' これらの点の、x方向のメッシュ線Mからの距離をそれぞれΔx_f（$<\Delta x$）、$\Delta x_f'$ とするとき、式（3）の差分表示は次のようになる。

$$\Delta x_f' - \Delta x_f = (u_f + C_f)\,\Delta t\,;$$
$$u_f' + 2C_f' = u_f + 2C_f - f_i u_f^2/\delta_f \cdot \Delta t \qquad (5)$$

ここに、ダッシュ”’”のついたものはJ＋1の時刻の量を、つかないものはJの時刻の量を表わす。いま水理量の値をメッシュ点で求めることが必要であるため、$\Delta x_f' < \Delta x$ と $\Delta x_f' \geqq \Delta x$ の2つの場合に分けて考える。すなわち、x_f' が次のメッシュ線M＋1に達しない場合と、これに達したかまたは通過した場合に分けて考える。



（1）$\Delta x_f' < \Delta x$　　（2）$\Delta x_f' \geqq \Delta x$

図－3　フロント部の計算法

（1）$\Delta x_f' < \Delta x$の場合

計算は格子点（M，J＋1）まで行なわれる。

$$x_f' = x_M + \Delta x_f'\,;\quad u_f' = -2C_f' + (u_f + 2C_f) - f_i u_f^2/\delta_f \cdot \Delta t \qquad (6)$$
$$C_f' = \sqrt{\Delta\rho g \delta_f/\rho}$$

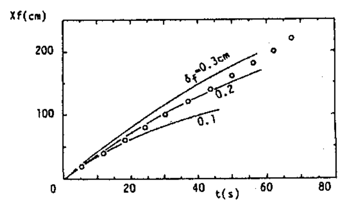
（2）$\Delta x_f' \geqq \Delta x$の場合

計算は格子点（M＋1，J＋1）まで行なわれる。この場合$\Delta x_f' - \Delta x$を改めて$\Delta x_f'$とおく。また、フロント位置x_f'、フロント位置での流速u_f'およびC_f'は（1）の場合と同様に求める。なお、メッシュ点（M＋1，J＋1）での水理量$Z_{M+1,J+1}$は、メッシュ点（M，J＋1）での水理量$Z_{M,J+1}$と同一時刻（t_{J+1}）におけるフロント位置での水理量Z_fを用いて次式で与えられる。

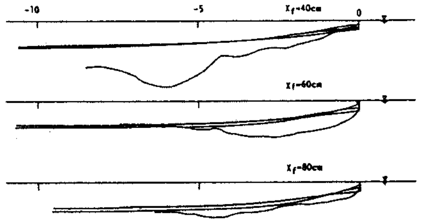
$$Z_{M+1,J+1} = \frac{\Delta x_f' \cdot Z_{M,J+1} + \Delta x \cdot Z_f}{\Delta x + \Delta x_f'} \qquad (7)$$

4．計算結果の検討

本モデルの実験との比較を図－4、5に示す。実験は、幅12.5cm、長さ3.5mの水路に塩水を貯めておき、上流から一定流量で淡水を定常的に供給して表面密度噴流を発生させる形で行なわれている。計算の初期条件はフロントが２０cm地点に達したときのフロントでの速度、流動厚さの実験値を与えた。境界条件は下流端（フロント）で$\delta=\delta_f$（前述）；δ_f=0.1, 0.2, 0.3cm、および上流端で $u\delta$＝一定とした。図－4においてδ_fの値によりフロント位置の計算結果が違っており、他の処理法を含めて再検討する予定である。図－5では、フロント部の不規則な運動のため比較は難しいが、計算値でフロントらしきものが一応出ている。



図－4　フロント位置の実験値と計算値



図－5　流動形状の実験値と計算値

参考文献

1）羽田野ら：第４０回土木学会中四国支部,pp.112-113,1988。
2）椿東一郎：水理学Ⅱ、森北出版。
3）岸ら：土木学会北海道支部技術資料、第２０号,pp.24-40,1964。